“ NAME ”

雨猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
“ＮＡＭＥ”

【Ｎコード】
Ｎ７１７８Ｌ

【作者名】
雨猫

【あらすじ】
名前、とは。
親から子へと最初に与えられる最高で最大のプレゼント、だ。親は精一杯の願いを込め、名を付ける。
それが時に残酷なモノとなるとも知らず。

（前書き）

これは、最良で残酷な名前の話。

読んでやってください。

名前は大切だと思う。
恐らく最初に親から子に与える大切な大切なモノ。
もし悪い名をつけた親は、こんな名前は嫌だった、とか子供に言われ続ける。

だけど…良すぎる名前も。時には残酷なモノになるんだ、と、俺はそう思った。
思っただけだ。俺には、どうすることもできない。

それは寒い冬の朝のことだった。その日は雪が降っていた。微かに白を被った道路を見て、俺は思わず笑ってしまった。

門の横に飾られた表札を見る。

『小谷（こたに）　一雪（かずゆき）』

自分の名を確かめて、そして俺はゆっくりとした足取りで、でも何だか愉快な気分で俺は未来（みく）の病室へ向かった。

「楽しそうだね、一雪。」

ドアを開け、挨拶をする間もなく未来はそう言った。
開口一番それかよ、と思いはしたが口には出さない。

「別に楽しい訳じゃねえ。」

「じゃあ、なに？雪が降って喜ぶなんて、お子様。」

「誰がお子様だ…」

くすくすと笑う彼女の名前は未来。未来は病気を患っている。カタカナ四文字くらいの意外にシンプルな病名。

今は少しテンションが低いが、元来の彼女は明るいのだ、きっと今も外で雪遊びしたいだろう。

「冗談。きっと…自分の名前だから嬉しいんだろうね。
“一雪”の“雪”で。」

「かもな。最近父さんに聞いた。一雪の由来は、雪のように真っ白い心であるように、って願いからきてるらしいんだ。」

そう語る俺に、未来はふうん、とつまらなさそうに適当に返事すると窓の外の雪を見つめた。

「いいなー。一雪のクセに良い名前つけて貰っちゃって。ふふ、私なんてばっかみたい。“未来”だって？ばかみたい、ホント、ばっかじゃないの？」

吐き捨てるようにそう言葉を紡ぐ未来。
俺には未来がなぜ、なにに対してそんなに怒ってるのかなんて分からなかった。だから少しうろたえながらも丁寧に言葉を返す。

「別に、ばかみたいでもないんじゃないか？その、“未来”なんて良い名前だと思うけど…」

「本当にそう思うの？だったら、一雪もばか。」

突然の「ばか」呼ばわりにムッとしながら、何と言い返せばいいのか分からない。言い返す言葉を探したが、脳に霧がかかったかのようで、何一つ思いつかなかった。

俺は結局未来の言葉の続きを待つことしかできなかった。

「…未来なんて、私にはない。」

長いようで短い沈黙の後、未来は唐突にそういった。暗く切ない声音。
びっくりして顔を上げる。未来は窓の方へ首を曲げていて、どんな顔をしているのかは見えなかった。
とても不吉な言葉だった。不吉な言葉を暗い声で語るもんだから、嫌な予感が無理やり植え付けられていく。

「それは、」

どういう意味だ？聞き返す勇気すらなく、口ごもった。

未来は、静かに続ける。

「私に残されてるのは、３ヶ月ちょっとの未来だけだよ。そんなの未来じゃないよ。」

「…嘘だ、ろ？」

「嘘だったらよかったのにね。」

目の前が急に暗くなった。未来はいつの間にか窓から目をそらし、こっちを見ていた。

未来は笑っていた。

昔の明るい笑顔じゃない。

ひねくれて皮肉めいた、そんな嘲笑。

悲しいと思えなかった。むしろ未来のその笑顔な恐怖を覚えた。なぜか怖くて仕方なくて、後退る。

未来は笑っている。

背中が、病室と廊下を繋ぐドアにぶつかる。

何がなんだか分からなくなって、俺はたまらず病室を飛び出した。

途中でぶつかりそうになった看護婦の叱るような声も無視して、俺はただ、家まで夢中で走り抜けた。

走って5分の距離がなぜか途方もなく長い道のりのようで。

心臓すら痛くなってきたころ、俺はやっと、自分の家に着いた。

門の横の、表札。

『小谷』

その文字の横に並ぶ、母さんの名前、父さんの名前、姉ちゃんの名前、そして自分の名前。

『小谷　一雪』

家を出るときはとてつもなく良い名前に思えた自分の名前が、今ではくすんだ文字の羅列にしか見えなかった。

俺はその日から、未来の病室にいけなくなった。

・・・・

3ヶ月なんて、あっという間だった。
むしろ『あっ』もいわない間に過ぎていったんじゃないか。

未来の葬式も同時にやってきた。

…俺はなぜ未来が死なないと確信していたんだろう。未来が死ぬなんて考えたこともなかった。

そう、きっとあのシンプルな病名に惑わされてただけなんだ。シンプルすぎるカタカナの病名に。

不治の病なら、もっと長くて漢字まみれの名前だという勝手なイメージに囚われて。

本当に勝手なイメージだ。

重い病気なんて『癌』くらいしか知らなかったくせに。

父さんも母さんも姉ちゃんも、おじさんもおばさんもクラスの奴らも、みんなが未来の死を悲しんで、泣いていた。

なのに、俺はなぜか泣けはしなかった。

俺はこれから先、何にどんな願いを込めてどんな名前をつけていくのだろう？

悪い名前だと怒られるのか、

良い名前だと誉められるのか。

残酷な名前だと、恨まれるのか。

いずれにしても、俺はもう『雪のように真っ白く』は生きられそうになかった。

だって、今。

父さんも母さんも姉ちゃんも、おじさんもおばさんもクラスの奴らも。

全員が未来に見える。

未来を失ってもなお、未来だらけのこの世界で、どう真っ白に生きろというんだ。

未来の“みらい”という名は、俺を未来永劫苦しめるための名前だったのかもしれない。

だとしたら…
名前なんていらない。

俺を惑わせたあの病気の名も。
俺に込められた願いの名も。
俺を苦しめていく未来の名も。

…いらないんだ。

全部、いらない。

（後書き）

これは、
未来永劫、彼を苦しめ続ける、未来の名を持つ少女の話。

これは、
雪のように真っ白く生きることを放棄した少年の話。

読んで下さって、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7178l/

“ＮＡＭＥ”

2010年11月12日07時25分発行